

民族問題とロシア思想家

——ベリンスキーのウクライナ観——

井 口 靖

はじめに

一九五六年歴史家上原専祿は「日本国民のための世界史」と題された講演の中で、現代世界を把握し得る歴史学・歴史教育のあり方を論じ、次のように「多民族国家としてのソビエト」研究の必要を説いた。

「ソヴェトの研究はロシア研究を中心にして、最近ずつと行われてまいりましたけれども、ソヴェトというものは多民族国家であって、決してロシア人だけの国家ではない……中略……ところが多民族国家としてのソヴェト体制の研究は日本ではほとんどやられていないで、資本主義社会を克服して社会主義社会をつくり出し、やがて共産主義社会の実現に努力しているとする、そういう角度からのソヴェト研究だけが行われている……中略……つまり多民族国家としてのソヴェト体制の歴史的分析というものはほとんどやられてはいないのであります」⁽¹⁾

アジア・アフリカ諸国のナショナリズムの高揚やハンガリー動乱を背景にして上原がこの指摘を行なつてから三十年以上が経過した。ソビエト・ロシア史の専門研究誌にはカフカス、中央アジアなどソ連の非ロシア人地域を扱った研究論文もしばしば掲載され、上原が提起した「多民族国家としてのソヴェト体制の研究」は着実に発展して

きているように見える。

しかしながらロシア・ソビエトを専門とせぬ人々にとっては、ロシア人以外の民族を軸としたロシア史研究やソビエト史研究というものはいまだなじみ深いものとは言えない。今年の夏、バルト海沿岸共和国はじめソ連内の民族地域での民族運動の高まりが世界の注目を集めたが、こうしたことがない限り一般の人々には(さきの上原の提起はその講演の題名が示す如く広く日本国民にとつての歴史認識のあり方を念頭に置いたものである)ソビエトがロシア人だけの国家ではないという事実は自覚されにくいように思える。今回『女子部論叢』の場をお借りしてロシア帝国の民族問題とロシア思想家のかかわりについでに拙稿を御紹介することにもそれなりの意味があるかと考えるゆえんである。

本稿で扱うのは一九世紀のロシアの思想家ヴィツサリオン・グリゴリーエヴィッチ・ペリンスキー(一八一〜四八)がウクライナ民族の言語や文化、民族運動に対してどのような態度をとつたかという問題である。

ウクライナは「小ロシア」とも呼ばれ(これに對しいわゆるロシアのことを「大ロシア」と呼ぶことがある)、ソ連南西部に位置する。四千万という人口はソ連内ではロシア人につぐものであり、ヨーロッパ全体で見ても西独、伊、英、仏の各国につき、スペインを上回っている。ウクライナ語はロシア語と同じく東スラヴ語に属し、両者の相違点は小さく両語の話者は相互に相手の言語を理解するのに困難を感じない程度である。この言語的接近性は、ウクライナを独立の民族ではなくロシア民族の一部と見なす見解を生む。本稿で扱うよりも少々後の時期になるが、一八六三年ロシア帝国の内務大臣ヴァリユーエフは「小ロシア民族なるものはかつて存在しなかつたし、現在も存在しないし、また存在し得ない」と述べてウクライナの民族運動の存立根拠自体を否定している。⁽³⁾

こうしたウクライナで近代文語が形成されウクライナ語文学が現われ出すのは一八世紀頃からである。⁽⁴⁾十九世紀に入るとクヴィトカールオスノヴィヤネンコ(一七七八〜一八四三)、タラス・シェフチェンコ(一八一四〜一八六一)な

どの作家・詩人の文学活動、コストマロフ（一八一七—一八九二）などの学者による歴史・民俗学研究の形でウクライナ民族の文化的自己主張は活発化していった。しかし、こうした動きはロシア帝国の統一性への反抗として権力側からは危険視されることが多かった。一八四七年シェフチェンコ、コストマロフは、ウクライナを含む諸スラヴ民族の独立国家から構成されるスラヴ連邦の理念をかかげた秘密結社「キリル・メトディオウス兄弟」への参加の故に逮捕され流刑とされている。

このような民族的自己主張とそれに対する弾圧について、当時のロシアの思想家はどのような態度をとったのだろうか。民族の壁を超えた理解と共感を持ち得たのか、それとも支配的「大」民族の側からは少数者（すでに述べたようにウクライナは全ヨーロッパ規模で見て決して「少数民族」とは言えないのだが）への理解は困難であったのか——本稿は文芸批評家として知られるペリンスキーを例にこの問題を考察する。ペリンスキーは一八三〇年代に文芸批評の分野で文壇にデビューし、現実生活と文学の関わり、近代文学における芸術性の問題、文学と国民的性格の問題などをめぐる数多くの論文を著した。本稿のテーマとの関連で特に注目すべき彼の思想の特徴はヘーゲル哲学、ことにその国家、国民観である。ヘーゲルにおける国家は家族と市民社会を止揚し、歴史における理性を代表する存在である。ペリンスキーの文学論においては、文学作品の精神と性格はまず作家の個性により定まるとしつつも「作家の個性が国民精神にむすび」ついて「民族的自覚の表現」となる時、その作品は社会的意義を増すと説かれる。⁵⁾ ここには作家という「個」と国民精神（「国家理念」との結合というヘーゲルの発想の反映が読みとれよう。ウクライナのような「国家なき民」）に対してこうした論理がどのように適用されるかが本稿の大きなポイントとなる。

今日巷間では「国際化」なる言葉がもてはやされているが、真に多様な民族、多様な文化への尊重がなされているとは言い難い。それは、さまざまな民族差別や、日本国民のアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ認識の状況を

考えれば明らかであろう。ベリンスキーの思想をたどることは、ロシア史や今日のソビエト理解のためにのみ必要
なわけではない。それは多様な民族が相互の文化を理解尊重する道を考えるうえでの、ケーススタディのひとつな
のである。

—

ロシアの思想家、なかでもベリンスキーをはじめ農奴制や専制政治の批判者として活躍し「進歩的」とされてき
た思想家たちがウクライナ民族にかかわる問題をどう見ていたか、——この問題についてウクライナ科学アカデミ
ー会員のE・C・シャブリオフスキーは一九五四年の「ロシア、ウクライナ再合同⁽⁶⁾三百周年に関するテーゼ」を引
用して答える——「ロシアの革命的活動家たちは常に、ウクライナ民族の自由な民族的発展の権利を承認し、その権
利をツァーリズムの転覆、ロシア民族の解放、ウクライナやわが国の他の諸民族の解放に結びつけた」——

また、シャブリオフスキーは別な機会にはウクライナ共産党中央委員会、ウクライナ共和国最高会議合同会議に
おけるブレジネフ演説を引用し、同様にロシアの「革命的民主主義者⁽⁸⁾」とウクライナの社会運動のつながりを強調
している——「タラス・シェフチェンコ、イワン・フランコ、レーシャ・ウクラインカ、ミハイル・コチュビンスキー⁽⁹⁾
の自由への燃えるような呼びかけはロシアの革命的民主主義者ベリンスキー、……中略……チエルヌイシェフスキ
ーの進歩的思想と合流したのである」⁽¹⁰⁾

このような、時の権力者の発言の引用に飾られた論文が、ソビエト政権の最も公式的な歴史観を伝えるものであ
ることは想像に難くない。シェフチェンコの「自由への燃えるような呼びかけ」がベリンスキーの「進歩的思想と
合流した」というブレジネフ演説とは相反する記述を、ソビエト国外の書物には容易に見つけることができる。チ

エコの哲学者マサリクの著書『ロシア思想史』は、オーストリア・ハンガリー帝国の支配下で独立を求め続けていたチェコ民族の関心を反映するかの如く民族問題への言及が多いが、そこには「ベリンスキーは小ロシア人の文学的努力を十分に評価」せず、「シェフチェンコの政治的企図を非難して」いたと述べられている。⁽¹²⁾

このように、ベリンスキーとウクライナ民族文化運動との間に対立を見出す見解について、ソビエト文献はどのような説明を与えるのであろうか——Ф・Я・プリーマは、ベリンスキーが一八四〇年代に「全体としてウクライナ文学の発達の可能性と正当性とを否定」するという「誤った立場」に立ったことを認め、その原因を『灯台』^{Маяк}『モスクワ人』といった保守的雑誌とウクライナ文学との結びつきを警戒したためだと説明する。⁽¹³⁾ロシアにおいては、西欧的な近代化にロシア社会の進むべき道を求める西欧派と、ロシアないしはスラヴ民族の伝統や固有性の中に西欧とは異なる有機的共同社会の契機を求めるスラブ派との二派の対立、論争があつたが、西欧派の代表たるベリンスキーは、文化の伝統や固有性を志向するウクライナの文学者がスラブ派の中の保守的傾向や国粹的傾向にからめとられることを懸念したというのである。

プリーマはソビエト科学アカデミー版ベリンスキー全集の注の中で、『灯台』の編集者B・C・ブラチュクの記事を引用してより具体的に論じている。ブラチュクはオスノヴィヤネンコのウクライナ語作品を論ずる中で「小ロシアことば」^{наше}⁽¹⁴⁾には外来語が少なく現代ロシア語よりも「千倍も本来のロシア語に近い」と賞賛し、ウクライナ語が保持している「純粋な、生まれながらの要素」に注目するが、プリーマによればこの態度は「近代の新しい形式、概念が豊富になることを阻み、ロシア文語とウクライナ文語の発達を妨げる」否定的な意味をもつものだったという。さらにプリーマはこのようなブラチュクの議論が「反動的王党派グループ」や「ウクライナ・ブルジョア・ナシヨナリズム」の中に支持を得たとして、それに対するベリンスキーの批判を弁護する——「新しいウクライナ文学にお

けるさまざまな現象に対してはベリンスキーの批評のような調子で語らぬわけにはいかなかったのである」⁽¹⁵⁾

このようなベリンスキー弁護は、我々を納得させるものとは言えぬように思える。ここに述べられているベリンスキーの姿は、《進歩的》陣営と《反動的》陣営のはざままで政治的・判断的によつてウクライナ文化を評価しているというものである。文学観、言語観、国家観といった思想内容それ自体に内在して、ベリンスキーのウクライナ観を検討することこそ思想家ベリンスキーの研究のために求められるのではないだろうか。次節からはベリンスキーの著作に即して、彼のウクライナ観を考察していきたい。

二

ベリンスキーは何よりも文芸批評家である。したがつてウクライナに対する彼の考え方も文芸批評という形で現われる場合が多い。それらを検討するにあつては、肯定的にせよ否定的にせよどのようなレベルでの評価なのかを明確にする必要がある。

- ① 個々の作家、詩人、その作品に対する評価
- ② ウクライナ語に対する評価
- ③ ウクライナ民族の自立性に対する評価

これらは後の論点ほど大きく、かつ根本的な問題となつていく。たとえ特定の作家や作品に一定の評価をする場合でも、ウクライナ民族の全体的な文化的発展の可能性に否定的な評価がなされるのなら、ベリンスキーが「ウクライナ民族の民族的発展の権利を承認」したとは言えないであろう。

そこで①のレベルについてまず見てみると、ベリンスキーはウクライナの作家、詩人、作品に対し、好意的に語

つている場合もあれば否定的に語っている場合もあり、その態度は一様ではない。

肯定的評価について見るなら、ベリンスキーはクヴィトカ¹⁵オスノヴィヤネンコについてしばしば好意的批評を書いている。たとえば、一八四一年、雑誌『祖国雜記』の書評欄ではオスノヴィヤネンコのロシア語作品『ハリヤフスキー氏』をとりあげ、注目すべき新刊が少なくて悩んでいた書評者はこの作品のおかげで救われたと述べて『ハリヤフスキー氏』をユーモアあふれる作品として紹介、「オスノヴィヤネンコの筆致は生き生きとして描写は限りなくこつぱいである。彼の物語はどこどこであまりに微に入りすぎているにもかかわらず、興味は全く減退しない」と書き進める。末尾には、オスノヴィヤネンコの次作への期待が述べられている。⁽¹⁶⁾

ベリンスキーのオスノヴィヤネンコへの注目は、この書評よりもかなり以前から見られる。一八三四年にはオスノヴィヤネンコの『小ロシア小説集』を「テーマの独自性と才能の独自性が産んだ高い文学的長所を特徴としている」と賞賛している。⁽¹⁷⁾ プリーマは、このようなベリンスキーのオスノヴィヤネンコへの注目をもって、「ベリンスキーは文学活動の初期には……中略……ウクライナ文学の……中略……重要な作品の登場に対しこれを励ます態度をとった⁽¹⁸⁾」と見なしている。

しかしここで注意せねばならぬ問題がある。ひとつは、ベリンスキーはオスノヴィヤネンコのロシア語作品には一定好意的であつてもウクライナ語作品に対してはそうではないということ。第二の点は、好意的評価にしてもそれは高次の文学作品としての評価ではなくより未熟な段階の文学の中で相対的にすぐれた作品として評価するといふ、いわば限定つき評価と思われるという点である。

第一の点について見ると、一八四四年『祖国雜記』一月号にでた書評において、ベリンスキーはハリコフで出版されたウクライナ文学雑誌『新月』^{モロジク}を批判的にとりあげ、オスノヴィヤネンコも「その活動をロシア語で始めた」

し「多くの作品をロシア語で書き自ら自分の小ロシア語小説をロシア語に訳した」ことを指摘してウクライナ語で書くことは不必要なことだと主張している。⁽¹⁹⁾ また、一八四一年の『祖国雜記』六月号の書評欄では、ウクライナ語・文芸作品集『つばめ』^{ラスチフカ}を酷評したベリンスキーはオスノヴィヤネンコのウクライナ語の小説『愛しのオクサーナ』の一節(ウクライナ語)を引用し、「農民ことばの間抜けた感じと農民の頭の鈍感さだけが脈うっている、何とすばらしい文学だ!」⁽²⁰⁾とまで述べているのである。

第二の点、好意的な評価も実は限定つきのものであるという点については、オスノヴィヤネンコの作品『マルーシャ』への書評(一八三九年)でベリンスキー自身が述べている。——「作品の真の長所をこえるような称賛は作品の長所を高めることはなくそれに傷をつける……中略……『マルーシャ』の中に我々は芸術^{フドリシエストウヱヌイ}的作品ではなく単に詩^{ポエチナエスキ}的な作品を見るのである」⁽²¹⁾——ここで「芸術的(フドリシエストウヱヌイ)」と「詩的(ポエチナエスキ)」という語が対比的に使われている。ベリンスキー全集によれば、一八三九年から四〇年にかけてベリンスキーは文学作品を「芸術的」なものと「詩的」なものに分け、後者を前者の水準に及ばぬものとする独特の用語法を使っていた⁽²²⁾という。この用語法からすればベリンスキーは、オスノヴィヤネンコの作品を「詩的作品」の枠内にとどめて評価しようとしていることになり、好意的な評価も実は限定つきのものであったことがわかる。

以上で明らかのように、オスノヴィヤネンコへの好意的発言をもってベリンスキーがウクライナ民族文化を評価し、その発展を支持していたと見なすことには無理がある。『マルーシャ』評の中でベリンスキーが、『マルーシャ』では各登場人物以上に重要な主人公は「小ロシア」であり、それこそが「この小説の魅力のすべて」⁽²³⁾と述べていることを根拠に、シャプリオフスキーは「ベリンスキーはウクライナ民族、その詩的作品、英雄的歴史に大きな関心と共感を向けていた」⁽²⁴⁾と説くが、『マルーシャ』評の全体的文脈は、むしろオスノヴィヤネンコへの過大評価を戒め

るものであり、ウクライナ文化への積極的関心を示すものとは思われぬと言うべきであろう。

三

次に第二のレベルの問題として、ウクライナ語、ウクライナ語文学の可能性に対するベリンスキーの見解を見てみよう。前節でも触れたように、オスノヴィヤネンコ個人には限定つきながらも一定の評価をしているものの、ウクライナ語に対するベリンスキーの態度はきわめて冷たい。一八四一年の『祖国雑記』八号の書評欄で彼は、ハリコフで出版された『穂束』^{スニツク}——ウクライナ年間作品集』をとりあげ、ウクライナ語近代文学の可能性について明確に否定しているのである。

ベリンスキーは、「小ロシア語」が「小ロシアの庶民すなわち農民」にしか話されていない言語である状況の中で「小ロシア語」の文学には意味はないと主張する。なぜなら農民は「ほとんど読み書きを知らない」のだから。⁽²⁵⁾このような主張をさらに徹底的に述べているのが、『穂束』^{スニツク}に先立つて『祖国雑記』六号に掲載された『つばめ』^{ラスチツカ}論である。『つばめ』論の表題は正式には、「小ロシア語作品集『つばめ』、三幕物小ロシア・オペラ『縁談』」となっており、ふたつの作品を一括して扱っているが、その理由は「これら二冊には私たちが特に論じたいと思う共通の問題がある……中略……どちらも小ロシア^{ナレイチエ}ことばで書かれている」からだと説明されている。さらにベリンスキーはこの批評で扱うべき問題を二点呈示する——「この世に小ロシア語^{ヤゼリク}というものは存在するか、それともそれは単なる方言なのか」「小ロシア文学は存在し得るのか、小ロシア出身のわれわれの文学者たちは小ロシア語^{パ・マロラシスキ}で書くべきなのか」⁽²⁶⁾

このふたつの問いは、ウクライナ語、ウクライナ語文学にとつてはまさに最重要の問いである。第一の問いに対

してベリンスキーは「小ロシア語は小ロシアが自立性をもっていた時代には実際に存在していた」ことを認めながらも、ウクライナの、ことに上層社会に「ロシア語とロシア、ヨーロッパの習慣」が摂取された結果「今ではもう小ロシア語は存在しない。白ロシア、シベリアその他それに類する地方方言のような小ロシアの地方方言があるだけだ」と結論する。⁽²⁷⁾

そこで問題は第二の論点「小ロシア語で書くべきか否か」の方に移る。ベリンスキーはここで文学の読み手を問題にする。——読み手の中には「田舎百姓」もいるかもしれないがそれはあくまで例外であり、文学の読者とは「高い教育」を受けた階層である。しかしウクライナ社会の上層の人々の生活はすでに、「一般民衆」^{プロトイノボリ}のことはである。「小ロシア語」の枠にはおさまってはいない。彼らは自らの感情や概念を「小ロシア語ではなくロシア語で、そしてフランス語でさえ表現する」——そのような教養ある人々にとつて「農民の生活それ自体」は「興味の乏しいもの」だ。「大作家ゴーゴリはウクライナの農村生活に取材したすぐれた作品を書いた。しかし、ゴーゴリが小ロシアを熱烈に愛しつつも小ロシア語ではなくロシア語で書きはじめた」この意味を考えよう——要するにベリンスキーは、民衆生活の諸断面を文学に昇華させるためには教養なき農民ことばである「小ロシアことば」では不可能であり、ウクライナ語近代文学は不可能であると主張するのである。

この主張は「祖国雑記」一八四四年一号における『新月』一八四四年号への批評でより明確な語で繰り返される——「もしもゴーゴリがその作品を小ロシア語の衣で包もうとしていたならば、それらは全く存在できなかつたことであろう」⁽²⁹⁾

以上より、ベリンスキーはウクライナ語文学自体に否定的であつたことは明らかであろう。次節では、より一般的な彼の文学観ともからめて、文学と民族性の問題を検討してみる。

『祖国雜記』一八四一年九月号から十二月号にかけて連載された『民衆詩』論は「国民性(ナロードノスチ)は現代の美学のアルファでありオメガである⁽³⁰⁾」ということばを冒頭に掲げ、文学と国民性、ないしは民族性⁽³¹⁾の問題を集中的にとりあげている。本稿の問題関心からは、ウクライナの「民族的」要素とロシアの「国民性」との関係がどう整理されるのが興味の対象となる。

前節でも問題となった「小ロシア人の文章語」問題については『民衆詩』論でも「小ロシア人の文章語はその教養ある社会階層の言語であるロシア語でなければならない⁽³²⁾」という見解が述べられる。問題はそれに続く部分である――

「もしも小ロシアに偉大な詩人が出現するとしたら、その詩人は心にロシアの利害を熱心に受け入れ、ロシアの苦しみに苦しみ、ロシアの喜びに喜ぶロシアの息子、ロシアの詩人としてのみ現れることであろう⁽³³⁾」

ここでは、「非教養語」としてのウクライナ語の限界からロシア語の使用を勧めるにとどまらず、ウクライナの詩人に「ロシアの息子、ロシアの詩人」となることが積極的に要求されている。このような見方の根拠は、以下に見る如く「国民」(ナーツィヤ)と「種族」(ブレイミヤ)との文化的段階の差に求められている。

「種族は民謡(ナロードナヤ・ペスニヤ)を持つことができるだけであって詩人(ポエート)を持つことはできない。偉大な詩人は偉大な国民(ナーツィヤ)のもとにのみ現れるのである――これに続く部分ではまたもや「小ロシア的な要素」を生かしつつもロシア語で書いたゴーゴリの例があげられる⁽³⁴⁾。

ここで、ペリンスキーの文芸理論における「詩人」という語の位置づけをおさえておかねばならない。藤井一行

氏によればベリンスキーは、「民族の幼年期の思考の所産」である「自然的詩歌」と「芸術的詩歌」とを区別し、後者は前者から成長するものとしたという。この分類にはヘーゲルの影響があり、「芸術的詩歌」とは「『一般的なもの』と『個別的なもの』との真の完全な融合が表現されている」もので「自然的詩歌」は十分に「『一般的なもの』を含む場合にのみ「芸術的詩歌」へと成長するのだとされる。⁽³⁵⁾——要するにベリンスキーは高次の文芸を「芸術的」、低次の文芸を「自然的」と対比しているということ、この対比は第二節で触れた「芸術的」と「詩的」⁽³⁶⁾との対比に重なるっている。

このようなベリンスキーの文芸理論を念頭に置いて見直すなら、「種族は民謡を持つ」だけで「詩人を持つことはできない」という『民衆詩』論のことばも理解しやすい。「民謡」とは低次の存在たる「民衆詩」であり「詩人」とは高次の存在——近代文学としての「芸術的詩歌」をこととする人々である。ウクライナ「種族」は「民衆詩」を持つことができても「芸術的詩歌」を持つことはできない。「芸術的詩歌」はロシアのような「国民」によってのみ創造される——これがベリンスキーの論旨なのである。

さて、次の問題は「国民」と「種族」との評価の差はどこから導かれるかである。独立国家の有無が両者を分ける指標であり、ヘーゲル的な国家重視が両者への評価の差につながっていることは想像できる。しかし、現時点において独立国家を持たぬことは、必ずしも「芸術的詩歌」を持たぬことに直結はしないと見え、ベリンスキーは「ロシアとチェコは、ヨーロッパの歴史と自己の歴史との接触を持ち、生活要素の点でヨーロッパを同化している」⁽³⁷⁾ことを根拠に、オーストリア支配下にあるチェコ人が「詩人」を持つことを認めている。「他のスラヴ諸種族、ブルガリア、セルビア、ダルマチア、イリュリア」⁽³⁸⁾については「芸術的段階へと発達する力のない民衆詩」しか持てないとされているのだからこの待遇は破格である。

チェコ人への評価が物語るのは、西欧史によつて代表される、文明の進歩との接点が、国家の有無と並んで民族（もしくは「種族」）評価の重要な要素となつてゐることである。「国民」と「種族」の関係、ウクライナの位置づけを明らかにするためにはいよいよペリンスキーの歴史観自体へと考察を進めねばならない。

五

一八四三年ペリンスキーは『祖国雜記』五月号に、ウクライナの歴史家H・A・マルケウヴィッチ（一八〇四〜六〇）の著書『小ロシアの歴史』をとりあげた長文の論文を発表した。この論文は、書評の形はとつてゐるもののマルケウヴィッチの著作自体についての言及は最後の四分の一程度で、半分以上の部分では歴史とは何か、歴史叙述とはいかにあるべきかといつた一般論が展開されており、ペリンスキーの歴史観を知るための好材料を提供している。しかも本論文中には、ヘーゲル哲学の方法が「人類の理性の意識の大道をひら」いたことや「哲学から科学をつくつた」ヘーゲルの功績への言及⁽³⁹⁾、そして「現代哲学の教養なくして法、芸術、学問その他について明確で正しい理解が持てるだろうか」という問いかけが述べられており、ペリンスキーへのヘーゲル主義的歴史観の影響が見やすくなつてゐる。国家・国民の役割を重視するヘーゲルの歴史観が彼のウクライナ観にどのように反映するかは、本稿のテーマにとつて最も重要なポイントとならう。

ペリンスキーによれば現代という時代の特徴は「これまでさまざまであつた知的生活の要素が統一、合一に向かつてゐる」ことであるという。ところが統一の段階に達するまでの間は、生活の諸要素は「個々別々に発達する」とが不可欠であつたとペリンスキーは見る。これは具体的には各国民が自己に固有の領域で文化を発達させるといふことを意味する——「各々の国民は生活の何かあるひとつの側面を發展させることを予定されている。ある国民

は戦争に大きな成功をおさめ、別の国民は学問に、三番目の国民は芸術……⁽⁴¹⁾——このように人類史、人類社会への国民単位での貢献という思想を語った上で、ベリンスキーは各国民(ナロート)の歴史に臨む際の歴史家の態度について述べる。

「どんな国民の歴史に接近する場合でも、「重要なのは「その国民の持つ意義」「他の国民との関係」「その国民が人類の中に占めている役割、彼らの歴史的役割の重要性」を明確に見きわめることだ。そうすればその国民の歴史の「大きさ」が明確となる——フランス、ドイツ、イギリス、イタリアといった「全世界的な歴史の舞台に活躍し、おのれの内に人類の運命を具現化している国家」と、トルコのように「一時的な引力の作用によって人類の歴史と触れあっているだけの国」とでは歴史叙述にも全く違った分量があてられねばならない——この点で『小ロシア史』は評価を誤っているとベリンスキーは筆を進める。いよいよ問題はウクライナ史評価である。

「小ロシアの歴史はもちろん歴史ではあるけれどそれはフランス史やイギリス史のような歴史ではない」——にもかからわずマルケーヴィッチは「他のもつと都合よい状況の下では偉大で永久的なものに発展し得た国民や国家の歴史を書いているようなつもりになって」⁽⁴³⁾——では、ウクライナの歴史とはどのように把握すべきなのか。ここに登場する指標が国家形成の有無である。

「小ロシアはかつて国家となつたことがない。したがつてことばの厳密な意味において歴史を持つてはいないのである。小ロシアの歴史とはアレクセイ・ミハイロヴィツチ帝⁽⁴⁴⁾の治世のエピソード以上のものではない。……小ロシアの歴史——これはロシア史の大河に注ぎこむ支流である。小ロシア人はつねに種族(ブレイミヤ)だったのであつて決して国民(ナロート)ではなかつたのである」⁽⁴⁵⁾

このようなベリンスキーの歴史観に触れる時、これまで見てきた彼のウクライナ語、ウクライナ文学観も一貫し

た流れの中で理解できる——「国家」を形成せぬ「種族」と「国民」（ナロト、もしくはナーツィヤ）との間には越え難い線が引かれており、近代文化は「国民」によって作られるものとベリンスキーは理解している。したがって「種族」たるウクライナの文化は近代的な「芸術的」水準には到達し得ないで「自然的」水準にとどまる。ウクライナ語で近代文学を作ろうとする試みなどは、こうしたウクライナの位置づけにてらして、無意味なこととされる。「小ロシア種族」は「ロシア国民」となることよってのみ、諸文化の総合によつて築かれつつある現代という時代に参加し得るからである——ベリンスキーによつてウクライナはあくまで「ロシア史の大河に注ぎこむ支流」なのであった。

六

以上、①個々の作家・詩人、作品評価、②ウクライナ語評価、③ウクライナ民族の歴史的自立性に対する評価、の三つのレベルでベリンスキーのウクライナ、ウクライナ民族文化観をたどってきた。最後にこれまで紹介した以外の、彼のウクライナにかかわる発言をいくつか紹介しよう。

——一八四一年、ペテルブルクでシェフチェンコの第二詩集『ガイダマキ』が刊行された。これに対する書評でベリンスキーは「読者諸君にはいわゆる小ロシア文学の諸作品についての我々の見解は周知のことである」とした上で「このような種類の諸作品は著者たち自身の楽しみとお説教のためのみ出版されているのだ」と断じた。⁽⁴⁶⁾

——一八四四年、コストマロフの博士学位取得論文『ロシア民衆詩の歴史的意義について』を書評でとりあげ、ロシアの国民は「南ロシア人もしくは小ロシア人」と「北ロシア人もしくは大ロシア人」との二系統に分けられるとするコストマロフの論点を引用する。他の論点とも一括してベリンスキーが与えるコメントは——これらが見ん

な正しいとしても論ずるほどの問題はなく、まして「完全な真実とは言えぬ」内容もある——というものであった。⁽⁴⁷⁾ 彼にとつて、風俗習慣でロシア、ウクライナに差があるとしても、それをもつて「ロシア国民(チロト)」を二つに分けるといふ議論は「真実とは言えぬ」ものであったのではないだろうか。

——一八四七年四月、ウクライナの民族主義的秘蔵サークル「キリル・メトディウス兄弟」が摘発され、シェフチェンコ、コストマロフらメンバーの多くは流刑に処せられた。ペリンスキーは同年十二月、パリ在住の友人アンネンコフあての書簡の中でこの事件に触れ、「キリル・メトディウス兄弟」の参加者たちや、それが結果として政府の言論弾圧強化を招いたことを激しく非難している。

彼の非難は、「小ロシアはロシアから分離するか、さもなければ亡びるかだ」と雑誌に書いたというウクライナの作家パンテレイモン・クリーシに対して特にきびしい——「ああ、このホホールども！ 全く羊のようなバカどもだ。……中略……一地方を分離することを印刷物で宣伝することを許すような政府がどこにあるというのか」⁽⁴⁸⁾

「ホホール」とはウクライナ風の弁髪をからかったウクライナ人への蔑称である。ペリンスキーの書簡は、ウクライナ分離独立の主張自体については吟味せず、それが専制政府を不必要に刺激したという政治的效果にもつぱら怒りを向けているが、『小ロシアの歴史』への批評で彼が展開したウクライナ観からすれば、分離独立の主張自体に対しても彼が反対であったことは自明と思われる。いずれにしてもこの書簡には、ウクライナ民族運動への何らかの理解を感じさせるものは皆無である。シェフチェンコに対しては「ホホール愛国主義の酒の愛好者」「ホホール・ラジカル」といった表現がなされている。⁽⁴⁹⁾

この書簡は「ペリンスキーの社会・政治的および美学的視点とシェフチェンコのそれとは、細部では意見を異にしたながらも最も重要な場合においては一致している」⁽⁵⁰⁾ といった従来のソビエト文献の公式的言辭が、とうてい額面

通りには受けとれぬものであることを示している。

なお、ペリンスキー全集には、一八四〇年シエフチェンコの第一詩集『コプザーリ』(ウクライナ語を好意的に評価した書評がペリンスキーの手になるものとして収録されており、⁽⁵¹⁾この書評を根拠にペリンスキーはシエフチェンコやウクライナ語文学に必ずしも否定的ではなかったという主張がされている。しかしこの書評は雑誌掲載時は無署名であり、執筆者をペリンスキーと特定することにはソビエト内外に異論がある。⁽⁵²⁾仮にこの書評がペリンスキーの手になるものとしても、一八四一年以降の彼の発言の文脈はウクライナ語文学に否定的に臨むものであると言い得るであろう。

七

さて、以上本稿ではペリンスキーの思想とウクライナ民族の民族的自己主張、文化運動との間の不一致を検討してきた。この不一致が生じてきた原因について、従来の研究はどのように説明しているのであろうか。

すでに述べたように、ソビエトの文献に見られる説明はペリンスキーとウクライナ民族の「進歩的」運動との間には基本的な一致があったとしつつ、ペリンスキーの一時的、部分的な「誤り」の原因を当時の保守派のウクライナ文学への接近に求めるといふものであった。⁽⁵³⁾このような説明は一九七〇年代末から出版された新版のペリンスキー九巻選集の解説にも踏襲されている。⁽⁵⁴⁾

前節で紹介した「アンネンコフあて書簡」でのシエフチェンコ批判についてアカデミー版ペリンスキー全集は、ペリンスキーが「第三課〔訳注、皇帝直属の公安警察〕によってひろめられた……デマ・中傷」によって、シエフチェンコを「ウクライナをロシアからひき離そうとするブルジョア・ナシヨナリスト」と見なすことから生じた誤りだ

と説明している。⁽⁵⁵⁾ この注釈は、ソ連史学の公式見解もまたウクライナの分離の主張は批判すべき「ブルジョアナシヨナリズム」と見なしていること、「革命的民主主義者」シエフチェンコはそのようなブルジョア・ナシヨナリスト、分離主義者ではなかったとされていることを示している。

この注釈に対しては西側のウクライナ研究者からの激しい批判がある。V・スウォボダは論文「シエフチェンコとベリンスキー」の中で、ベリンスキー自身権力側からは警戒されていたのであるから、警察側からの「デマ・中傷」を信じてシエフチェンコ批判を行なったのだという説明は信じ難いと指摘する。シエフチェンコはウクライナ分離独立を望んでいたと見なすスウォボダは、「心からロシア帝国の拡張に賛成であった」ベリンスキーは、シエフチェンコの件では積極的に「政府側に立ち」「ウクライナの民族主義を抑圧しようという第三課の努力を支持した」のだと主張している。⁽⁵⁶⁾

スウォボダの主張はソビエト的公式と正面から対立するものとして興味深いものであるが、ベリンスキーのロシア大國主義的姿勢を批判するあまり、逆にウクライナ・ナシヨナリズムからの増巾がかかっているようにも感じられる。スウォボダにせよアカデミー版ベリンスキー全集の注にせよ、ヘーゲルの歴史観との関係に触れるところがほとんどないのは残念である。

アカデミー版全集にも、ヘーゲル哲学と彼のウクライナ観のかかわりに触れた注釈がひとつ存在している。第四節で紹介した『民衆詩』論の注の中で「C・チェレミンは、「ウクライナ、その文化、その言語」についてのベリンスキーの「誤った発言」は、「当時ベリンスキーの興味をひいていたヘーゲルの歴史哲学の考え方と関係がある」として「スラヴ諸民族の全世界史的役割を軽視していたこの考え方の反動性をベリンスキーは当時まだ自覚していなかった」と述べる。⁽⁵⁷⁾

これはベリンスキー全集の注の中で最も思想そのものにかかわって、彼のウクライナ観を説明した文章と思われる。しかしもちろんこの注も十分ではない。ヘーゲル歴史哲学の「反動性」とは、「スラヴ諸民族の軽視」といったスラヴ民族観の問題としてのみ把握されるべきではない。それはより広く国家の位置づけ——国家観の問題とも結びつけて把握されるべきであろう。

むすび

以上、本稿ではソビエトにおいて「進歩的」人物とされ、非ロシア民族の文化に対してもよき理解者と描かれがちであったベリンスキーが、ウクライナ民族の文化、言語に否定的評価を与えていたこと。その背景には国家を重視するヘーゲルの歴史観があり、「国家を持たぬ」ウクライナ民族を「国民」より下位の「種族」と位置づけ、ロシア「国民」になることにのみ人類史への参加の道があるという発想があつたことを見てきた。

ベリンスキーは一八四八年六月に三十七歳で没する。一八四八年とはオーストリア帝国の革命の年。この革命の中、ハンガリー、セルビア、チェコなどの諸民族の民族運動は活発化し、その様は「諸民族の春」と形容された。

この事態を十分に観察する時間を得たならば、ベリンスキーの少数民族観には新たな変化が起つたであろうか——「四八年」以後のヨーロッパ、ことに中・東欧では「民族」の問題は避けて通れぬ問題となる。五〇年代以降に活躍する「革命的民主主義者」チエルヌイシェフスキーの著作にはウクライナ語やウクライナ語文学への好意的発言が見られ、オーストリア三月革命の分析を通して革命における少数民族への配慮の重要性を論じた論文も存在する。ソビエトにおいては同じく「革命的民主主義者」と呼ばれているものの、チエルヌイシェフスキーとベリンスキーはこと民族問題に関してはかなり異なる姿勢を見せているのである。⁽⁵⁸⁾

ロシア帝国の民族問題とロシア社会思想との関係という問題は、個々の思想家に即し具体的に考察されるべきものであることは言うまでもない。「革命的民主主義者」ゲルツェン、ドブロリユボフ、スラヴ派の思想家たちなどのウクライナ観、民族問題観についても機会を改めて検討し、多民族社会における民族問題の思想的自覚の歩みをあとづけていきたいと思っている。

- (1) 上原専祿、『歴史意識に立つ教育』国土社、一九五八年、一七五頁
- (2) 田中克彦、H・ハールマン、『現代ヨーロッパの言語』、岩波新書、一九八五年、一〇八頁
- (3) マサリック、佐々木俊次訳、『ロシア思想史』、みすず書房、一九六二年、第I巻二四〇頁
- (4) 田中、ハーマルマン、前掲書、一〇九頁
- (5) 金子幸彦、『ロシア文学案内』、岩波文庫、一九六一年、一二〇頁
- (6) 一六五四年ウクライナ・コサックの首領ボグダン・フメリニツキーはモスクワ国家との合同を宣言。ウクライナはモスクワ大公国と合同した。ウクライナ、ロシアが未分化であった古代ルーシの時代と同様の状態への回帰というところから、これを「再合同」という。
- (7) E.C. Шаблюковский «Чернышевский и Украина» Киев 1978 с.24
- (8) 革命的民主主義者とはペリンスキー、ゲルツェン、チェルメイシエフスキー、ドブロリユボフらを指す。チェルメイシエフスキー、ドブロリユボフは一八六〇年代はじめの農奴制廃止の前後、農民を主体とする「下からの革命」によるロシア社会の変革を考えていたと言われる。
- (9) フランコ(一八五六〜一九一六)、ウクラインカ(一八七二〜一九二三)、コチュビンスキー(一八六四〜一九一三)、いずれもウクライナの作家、詩人。
- (10) E.C. Шаблюковский, Н.Г. Чернышевский и украинская культура, в кн. «Н.Г. Чернышевский и современность» изд. НАУКА, М. 1980 с.144

- (11) マサリック(一八五〇—一九三七)はプラハのカレル大学の教授を勤めるとともにチェコ独立をめざすチェコ人民党創立に参加。第一次大戦後チェコの独立が果たされると共和国初代大統領に就任した。『ロシア思想史』はチェコ独立以前の一九一三年、ドイツ語で出版された。
- (12) マサリック、前掲書、第I巻二九二頁
- (13) Ф. Я. Прийма. Шевченко и русское освободительное движение 1840—1860 х годов. в кн. «Тарас Шевченко, отделение литературы» М.1962. с.162.
- (14) ロシア語 наречие は、何々語とゆう時の「語」に相当する язык に対して、何々方言、何々弁などの「方言」に相当する語である
- (15) В. Г. Белинский, Полное собрание сочинений М. 1953—57 (以下 Б.と略記) т. V. с. 800
- (16) В. т. IV. с. 399
- (17) В. т. I. с. 239
- (18) «Тарас Шевченко, отделение литературы и языка» с. 161—162
- (19) В. т. VIII с. 105—107
- (20) В. т. V с. 179
- (21) В. т. III с. 52
- (22) В. т. IV с. 626
- (23) В. т. III с. 54
- (24) Е. С. Шаблюевский «Чернышевский и Украина» с. 24
- (25) В. т. VII с. 287
- (26) В. т. V с. 176
- (27) там же с. 177
- (28) там же с. 178—9
- (29) В. т. VIII с. 107

- (30) B. T.V c.289
- (31) ロシア語「ナロート」(народ)は、民族、国民、民衆といった意味を持つ。スラヴ起源の語「ナロート」に対し、英語の「ネーション」に相当する「ナーツィヤ」(нация)も、「国民」「民族」の意に使用され、「ナロート」に比してより近代的な「国民」というニュアンスが強い。これら以外に、より小さな民族集団を指す「プレーミヤ」(племя)「種族」という語もある。
- (32) B. T.V c.330
- (33) ТАМ ЖЕ
- (34) ТАМ ЖЕ
- (35) 藤井一行、『反逆と真実の魂——ベリンスキーの生涯と思想』、青木書店、一九八〇年、二一八頁
- (36) 本稿八頁
- (37) B.T.V c.330
- (38) ここにはポーランドの名があがっていない。西欧との接触や過去における独立国家としての歴史を持つポーランドが、「国民」として明示もされなければ「他のスラヴ種族」にも数えられないのは奇異に思える。ベリンスキーはポーランドを「国民」と見なしていたが、それを明示することは現にポーランドを支配しているロシア帝国では、検閲との関係上困難だったのではないか、と思われる。
- (39) B. T.VII c.49
- (40) ТАМ ЖЕ. c.54
- (41) ТАМ ЖЕ. c.45
- (42) ТАМ ЖЕ. c.59
- (43) ТАМ ЖЕ. c.63—64
- (44) ロシア、ウクライナ再合同時のロシア皇帝
- (45) B. T.VII c.60
- (46) B. T.VI c.172

- (47) В. т. VIII с.153
- (48) В. т. XII с.441
- (49) Там же. с.440
- (50) «Тарас Шевченко, отделение литературы и языка» М. 1962 с.161—162
- (51) В. т.IV. с.171—172
- (52) Ю. Окман. «Детопись жизни и творчества В.Г. Белинского» М. 1958, с. 568 西國のウクライナ民族問題 V. Swoyoda "Shevchenko and Belinsky" in "Shevchenko and Critics" G.S.N. Luckyj ed. Toronto. 1980. p303~323
- (53) 本稿五頁
- (54) В.Г. Белинский, Собрание Сочинений в девяти томах. т. V. с.579, т. IV с.605
- (55) В. т. XII с.571
- (56) G.S.N. Luckyj (ed.) "Shevchenko and critics" Toronto. 1980. p.316—317
- (57) В. т. V. с.821
- (58) チェルヌイシェフスキーの民族問題観については拙稿『チェルヌイシェフスキーとウクライナ民族問題』(一橋大学大学院修士論文)で報告した。